慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	WAI技法による自我の実証的研究 : self-imageの内容と構造の分析
Sub Title	
Author	岩熊, 史朗(Iwakuma, Shiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1992
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.34 (1992.)
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000034-0079

ついて述べる。

(1) わが国の都道府県の警察本部には筆跡担当官が必ずおり，応用筆跡学の世界をつくり，技法の開発が努力されているが，その実際は基本的には直観と経験に依存する部分も多い。これに対しては科学的批判も生じやすい。この点，本研究は直観・印象の意義について一種の根拠付けを行ったことにもなり，現場の研究者にも勇気を与えることになろう。

(2) この研究の意義は両義的であり，現行の筆跡鑑定に対していっそうの客観化と標準化を要請するものである，ともいいうる。

(3) 本研究の今後については様々なことが考えられる。実用上と研究上の両意義において，研究操作全体のいわば短縮版が必要か，必要でないかが1つの問題であろう。他の興味ある問題は筆跡の評定者または判断者の集団の作り方をどのようにするかである。必要の都度，無作為抽出・依頼するのか，あるいはまた陪審制度のように一定数の素人の集団をつくるのかなど，種々の形が考えられる。

(4) 人格類型つまり類似人格群に対する一定の筆跡群の対応がかくも明快に証明されたことは画期的である。教育心理的，臨床心理的，組織心理的等の活用も考えられる。しかし筆跡の個人別弁別は本研究の延長上に考えられるのであろうか，それとも別種の研究とすべきものであろうか。

(5) 筆跡面相は筆跡のあり方と人格のあり方の分かち難い複合体の知覚である。しかしこの筆跡—人格間の連関は人格内部の“ブラックボックス”に潜在する。筆跡面相の発掘と人格内部の連関の分析とは今後の二大課題であろう。

本論文が以上 (3)—(5) に述べた諸問題についての展望を欠いていたことは惜しまれる。しかしそれは筆者の今後に期待すべきことであって，本研究の価値を傷つけるものではない。これまで述べたように，本研究で得られた知見は，それ自体，学術上貴重な知見であることはもちろん，社会的意義，応用可能性などを合わせ考えると，高く評価できるものである。

以上により，筆者は本論文によって博士（社会学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

社会学博士

甲 第1125号　岩 熊 史 朗

WAI 技法による自我の実証的研究
——Self-Image の内容と構造の分析——

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授　社会学研究科委員
文学博士　根 田 仁
副査　慶應義塾大学　新聞研究所教授
社会学研究科委員
哲学博士　岩 男 寿美子
副査　北陸学院短期大学教授
国際基督教大学名誉教授
星 野 命

内 容 の 要 旨

われわれにとっての“私”あるいは“自分”が，われわれに様々な形で影響を及ぼしている。この“私”あるいは“自分”は，心理学において自我あるいは自己という概念の下に研究されているが，本研究の目的は，この自我・自己を実証的に分析することである。論文は4部，11章から構成されており，第1部では，これまでに行われた自我・自己に関する理論的な考察と実証的な研究を概観している。そして第1章では，心理学で扱われる様々な現象が自我・自己の概念なしには説明できないことを，Allport (1943) の説に従って述べている。

第2章では，自我・自己の理論の中から，特にその後の研究と強い影響力を及ぼしている James, Freud, Erikson, Rogers, Allport らの理論について概観している。彼らは様々な視点から自我・自己を分析しており，その理論の意味するところも相互に異なっているが，これらの理論から，自我・自己について考える上での視点を得ることはできる。その1つは，自我・自己がどのような領域や範囲に及ぶものであるか，あるいは，どのような側面を持っているかということである。2つめは，そのような自我・自己の各側面や領域がどのように関連しあい，どのような構造を成しているかということである。そして3つめは，自我・自己がどのような機能を持っているかということである。自我・自己の理解には，これらの視点から捉えられた自我や自己を総合的に考察することが必要と思われる。

第3章では，自我・自己に関する実証的な研究について，実験社会心理学的な研究，発達的な研究，自由回答

法を用いた研究に分けて述べている。実験社会心理学での研究には，それまで看過されていた自我・自己の側面を扱ったものが多い。発達的な研究については，自己評価，自己概念，自己同一性を分析したものを中心に取り上げたが，実際，自我・自己に関する発達的な視点からの研究では，これらを扱ったものが多い。さらにこの章では，自我・自己を実証的に分析する上での self-image や自己概念の有効性を示した上で，WAI 技法をはじめとする自由回答法を用いた研究の分析手続きの多様性と有効性について検討を加えている。

第2部では，槇田を中心とする WAI 技法による self-image の研究を取り上げている。まず，第4章では，槇田らの研究プロジェクトの目的と方法について述べている。WAI 技法は，被験者が「私は誰でしょう？」という問に自問自答して 20 の回答を記述するものであり，self-image を分析する上で有効な技法である。槇田らの目的は，この技法を用いて，①実証的な方法で個人の self-image を具体的に捉え，それがどのような範囲に及ぶかを把握すること，②様々な self-image がどのような頻度で現れるかを分析すること，③個人の持つ多くの self-image が相互にどのような関連を持っているかを分析することである。また，④WAI 技法をパーソナリティ診断を行うための技法として確立することも目的としている。

第5章では，槇田らが基準書と呼ばれる WAI 技法のための反応カテゴリーを作成した過程について述べている。これは WAI 反応の具体的な内容を把握するために，反応の内容分析を通じて帰納的に作成されたもので，基準書の一番最初の版は 1983 年に作成された。この 1983 年度版基準書は，反応を内容分析の手法である川喜田（1967）の KJ 法で分析した結果に基づいており，小項目と呼ばれている 1,786 のカテゴリーを持っている。その後，「基準書の改訂→反応の分類→集計→反応傾向の分析→基準書の改訂」という過程を繰り返して，基準書の精緻化が進められ，その結果，300 の小項目を持つ 1986 年度版基準書が得られた。この基準書はかなり安定性があり，その後，1988 年度までほとんど変更を加えられずに分析に用いられた。しかし，この基準書はまだカテゴリー数が多く，これを用いて分類を行うには，数ケ月に及ぶトレーニングを要する。そこで，さらに小項目の併合を中心とする基準書の改訂を行ない，その結果，199 の小項目を持つ 1989 年度版基準書が完成された。この基準書では，199 の小項目が，《社会》，《家庭》，《個体》，《能力》，《情意》，《力動》，《指向》，《その他》，《無回答》の9つの大項目に分類されている。これは，パーソナリティのほとんどすべての側面についての記述が，WAI 技法において出現し得ることを示しており，self-image あるいは自我・自己の理解に対する WAI 技法の有効性を示唆している。

第6章では，槇田らが WAI 技法で得られた小学生から老人までの約 14,000 名の反応を，1989 年度版基準書を用いて分析した結果について述べている。そこでは，WAI 反応のいくつかの特徴が見出されている。まず，WAI には個人にとって重要なもの，あるいは，重要な事柄が現れる傾向がある。また，WAI 反応には，指向的側面，デモグラフィックな属性，社会関係についての記述が多い。これは，このような側面や属性が self-image において，特に重要で，中心的なものである可能性が高いことを示唆している。発達的な変化についてもいくつかの特徴を捉えることができた。まず，児童期から青年期に至る発達においては，個人の社会的あるいは生物学的基礎が self-image の中で顕在性を失っていき，その一方で性格が顕在化してくるという特徴がある。成人期の特徴としては，職業と家庭が self-image の中で重要な位置を占めているということが挙げられる。そして老年期には，self-image の広がりが失われていくという特徴が見られたが，その一方で，自己や社会に対する肯定的な態度が現れている。

第7章では，WAI 技法で得られた回答の間の関連性を調べ，そこから各個人の self-image の構造を分析する試みについて述べている。回答間の関連性を調べるためには，回答を被験者自身に分類させる方法と，被験者に回答を対呈示して関連の強さを評定させる方法がとられた。さらに，これらのデータに基づく解析結果を被験者に示して，インタビューが行われている。その結果，多くの被験者において，2 種類の方法で得られた回答間の相互関連性に整合性が認められた。この結果は，2 つの方法の妥当性を示すと同時に，self-image が個人の中で構造化されていることを示唆している。また，相互関連性の評価のデータを階層クラスター分析によって解析した結果について，多くの被験者が納得できると述べていることも，これを支持している。その他に，多次元尺度法による回答の関係の分析も行われ，これらの方法を総合的に用いることによって，被験者の self-image の構造が把握されることが示された。

第3部では，WAI 技法で得られた反応を，第2部で述べた基準書によって分類し，その反応パターンの分析を行っている。まず，第8章では，反応パターンの分析

の方法論上の問題について検討を行っている。それによると，反応パターンの分析は，林の数量化Ⅲ類を用いることによって体系的に行うことが可能となり，その結果，それぞれの反応は，個々人の反応のまとまり方を反映するような複数の次元のうえに位置づけられることになる。このような次元で構成される self-image の空間は，個人内の構造とは別の意味で self-image の構造と言うことができる。これは，多くの個人から得られた個々の WAI 反応を構成要素とし，個々の WAI 反応は，その構造において，反応パターンの類似性に基づいて位置づけられる。

第9章では，小学生から高校生までの約 5,000 名の WAI 反応の反応パターンの分析が示されている。その結果，性格―デモグラフィックな属性の軸，自己に対する意識の軸，欲求・希望・願望の軸の3つの次元から得られた。さらに，各軸でのカテゴリー・ウエイトに基づき，非階層クラスター分析で小項目を分類した結果，社会・生物的基礎，性格，欲求と自己評価の3つのクラスターが得られた。このクラスターに基づき被験者を分析した結果，クラスター間に反応傾向の違いがあることが示された。社会・生物的基礎のクラスターには，ほとんどの被験者が言及しており，しかも，その反応数も多い。それに較べて，性格のクラスターと欲求・自己評価のクラスターは，1人あたりの反応数が少ない。また，年齢との関係を見ると，性格と欲求・自己評価は年齢とともに言及する者の数が増えている。さらに，言及しているクラスターの組み合わせで被験者を分類した結果，ほとんど被験者が，社会・生物的基礎だけに言及する者，社会・生物的基礎と性格に言及する者，社会・生物的基礎と欲求・自己評価に言及する者，3つのクラスターすべてに言及する者の4つのグループいずれかに分類された。これと年齢との関連を見ると，社会・生物的基礎にだけ言及する者は年齢を追うごとに減少し，3つのクラスターすべてに言及する者は増加している。これらの結果を総合すると，self-image の発達の初期の段階で中心となるものは，社会・生物的基礎であり，その後，性格や欲求・自己評価が現れてくると考えられる。これは，発達に伴って，self-image が分化して多様な内容を含むようになることを示しており，また，self-image が抽象化あるいは内面化することを示している。

第10章では，小学生から老人までの約 14,000 名の WAI 反応を，1989 年度版基準書によって分類し，その反応パターンを数量化 III 類で分析した結果について述べている。そこでは，I. 内容的把握―形式的把握の軸，II. 自己に対する意識の軸，III. 実存的意識・非日常的意識の軸，IV. 欲求・希望・願望の軸，V. 家系・家族の軸の5つの次元が得られた。また，これらの軸での被験者のサンプル・スコアを分析した結果，年齢や性別による self-image の具体的な変化が捉えられた。さらに，数量化Ⅲ類で得られたカテゴリー・ウエイトに基づき，クラスター分析によって小項目の分類を行った結果，A. 性格（気質），B. 性格（力動），C. 身体・能力・日常生活，D. 希望・願望，E. 祖父母・父母，F. 職業・家庭，G. 自己実現的欲求，H. 学校生活，I. 基本属性，J. 実在的自己意識の 10 のクラスターが得られ，これらのクラスターに対する言及率と性・年齢との関連が分析されている。また，各年齢での WAI 反応の一般的な構成を，クラスターの言及率とクラスター間の関連（共通性）から分析した結果，小学生の反応は，身体・能力・日常生活，学校生活，基本属性，気質を中心に構成され，中学生ではそれに力動が加わり，さらに高校生では希望・願望が加わる。大学生では，これらの間の共通性が強まり，これらが1人の被験者の反応に同時に現れることが多いことが示された。20 代になると，学校生活に代わり職業・家庭が顕著になり，希望・願望があまり現れなくなる。それ以降 40 代までは比較的安定しているが，50 代になるとそれに加えて自己実現的欲求が現れる。60 歳以上では，自己実現的欲求が顕在的になる一方で，性格の顕在性が薄れる傾向がある。最後に，10 のクラスターを I 社会・生物的基礎，II 性格，III 欲求・自己評価の3つの大クラスターに併合し，その言及パターンの分析を行っている。

第 10 章では以上のような結果が得られたが，これらは，self-image のいくつかの大きな特徴を示唆している。その1つは，各個人の WAI 反応の中に意味的な連関があるということである。これは，数量化Ⅲ類に基づく WAI 反応の分類が意味内容の類似に基づくものではなく，反応の相関関係あるいは共変関係に基づいたものであるにも関わらず，クラスターが基準書とも対応するような意味内容のまとまりを持っていることに示されている。2つめの特徴は，身体を核とする身辺的な記述が self-image の不可欠な要素であるということである。このような記述は，1つのクラスターを形成し，しかもほとんどすべての被験者によって言及されている。そして発達的な特徴としては，児童期から青年期にかけて個人の self-image が分化し，多様な内容の self-image が含まれるようになること，学生の間は学校生活が self-image の重要な要素であるのに対し，学校の卒業後は

職業や家庭がそれに代わること，自分の性格についての self-image は，児童期から青年期にかけて次第に顕著になること，高校生や大学生という子供時代の最終段階で希望や願望が顕著になり，加齢が進むに従って，自己を包括的に意味づけたいという欲求が，self-image に大きく反映されるようになることなどが示された。

第4部の第11章では論文全体のまとめを行った上で，自我・自己研究における研究結果の意味づけを行っている。そこでは，自我・自己の領域・範囲，構造，機能などの視点から研究結果に考察を加えている。そして最後に，今後の WAI 技法による自我・自己の研究についての展望を述べている。

論文審査の要旨

岩熊史朗君より提出された学位請求論文『WAI 技法による自我の実証的分析——Self-Image の内容と構造の分析——」は，心理学における重要テーマの1つである自我あるいは自己について，実証的な方法を用い分析を試みた労作である。

本論文は，「本編」，「図表編」，「資料編」の3編から成っている。「図表編」には，本編で言及されている図表がまとめて掲載されている。「資料編」には，データの収集に用いられた用紙，分析に用いられた反応カテゴリー，反応頻度等の基礎データ，そして，小学生から老人に至る WAI の事例が掲載されている。「本編」は，4 部，11 章から成り，その内容は以下のようになっている。

第1部の「自我・自己の研究の流れ」では，これまでに行われた自我・自己に関する理論的な考察と実証的な研究を概観している。まず，第1章の「序にかえて」では，心理学で扱われる様々な現象が自我・自己の概念なしには説明できないことを，Allport (1943) の説に従って具体的に示している。

第2章の「自我・自己の理論」では，自我・自己の理論の中から，特にその後の研究に強い影響力を及ぼしている James, W., Freud, S., Erikson, R. H., Rogers, C. R., Allport, G. W. らの理論を取り上げている。彼らは様々な視点から自我・自己を分析しており，その理論の意味するところも相互に異なっている。しかし，これらの理論から，自我・自己について考える上での視点を得ることはできるとして，著者は3つの視点を提示している。第1は，自我・自己がどのような領域や範囲に及ぶものであるか，あるいは，どのような側面を持っているかということである。第2は，そのような自我・自己の各側面や領域がどのように関連しあい，どのような構造を成しているかということである。第3は，自我・自己がどのような機能を持っているかということである。そして，自我・自己の理解には，これらの視点から自我や自己を捉え，総合的に考察することが必要であると提言している。

第3章の「自我・自己の実証的研究」では，自我・自己に関する実証的な研究について，実験社会心理学的な研究，発達的な研究，そして，自由回答法を用いた研究に分けて述べている。実験社会心理学における研究では，それまで看過されていた自我・自己の側面を扱ったものが多いことを指摘し，発達的な研究については，自己評価，自己概念，自己同一性を分析したものを中心に取り上げている。さらにこの章では，自我・自己を実証的に分析する上での self-image や自己概念の有効性を示した上で，WAI 技法をはじめとする自由回答法を用いた研究の分析手続きの多様性と有効性について検討を加えている。

第2部の「槇田らの WAI 技法による Self-Image の研究」では，著者自身も参加して進められた槇田を中心とする研究が取り上げられている。まず，第4章の「槇田らの研究の目的」では，槇田らの研究プロジェクトの目的と方法が示されている。WAI 技法は，被験者が「私は誰でしょう?」という問に自問自答して 20 の回答を自由に記述するものであり，self-image を分析する上で有効な技法であるとしている。槇田らの研究の目的は，この技法を用いて，①実証的な方法で個人の self-image を具体的に捉え，それがどのような範囲に及ぶかを把握すること，②様々な self-image がどのような頻度で現れるかを分析すること，③個人の持つ多くの self-image が相互にどのような関連を持っているかを分析することである。さらに，④WAI 技法をパーソナリティ診断を行うための技法として確立することも目的としている。

第5章の「基準書の作成」では，“基準書”と呼ばれる WAI 技法のための反応カテゴリーの作成過程について述べられている。これは WAI 反応の具体的な内容を把握するために，反応の内容分析を通じて帰納的に作成されたものである。その後，「基準書の改訂→反応の分類→集計→反応傾向の分析→基準書の改訂」という過程を繰り返して，基準書の精緻化が進められ，1989 年度には，199 の小項目を持つ基準書が完成されている。この基準書では，199 の小項目が，《社会》，《家庭》，《個体》，《能力》，《情意》，《力動》，《指向》，《その他》，《無

回答〉の9つの大項目に分類されている。これは，パーソナリティのほとんどすべての側面についての記述が，WAI 技法において出現し得ることを示しており，self-image あるいは自我・自己の理解に対する WAI 技法の有効性が示唆されている。

第6章の「基準書による WAI 反応の分析」では，WAI 技法で得られた小学生から老人までの約 14,000 名の反応を，1989 年度版基準書を用いて分析した結果について述べられている。ここでは，WAI 反応のいくつかの特徴が示されている。まず，WAI には個人にとって重要なもの，あるいは，重要な事柄が現れる傾向がある。また，WAI 反応には，指向的側面，デモグラフィックな属性，社会関係についての記述が多い。この結果から，これらの側面や属性が self-image において，重要で，中心的なものである可能性が高いと著者は指摘している。発達的な変化についてもいくつかの特徴が挙げられている。まず，児童期から成年期に至る発達においては，個人の社会的あるいは生物学的基礎が self-image の中で顕在性を失っていき，その一方で性格が顕在化してくるという特徴がある。次に，成年期には，職業と家庭が self-image の中で重要な位置を占めているという特徴がある。そして老年期には，self-image の広がりが失われていく一方で，自己や社会に対する肯定的な態度が現れていることも示されている。

第7章の「WAI 反応の相互関連性の分析」では，WAI 技法で得られた回答の間の関連性を調べ，そこから各個人の self-image の構造を分析する試みについて述べられている。回答間の関連性を調べるために，回答を被験者自身に分類させる方法と，被験者に回答を対呈示して関連の強さを評定させる方法がとられている。さらに，これらのデータに基づく解析結果を被験者自身に示して，インタビューも行われている。この結果，多くの被験者において，2 種類の方法で得られた回答間の相互関連性に整合性が認められ，この結果は，2 つの方法の妥当性を示すと同時に，self-image が個人の中で構造化されていることを示唆していると考察している。また，相互関連性の評価のデータを階層クラスター分析によって解析した結果について，多くの被験者が納得できると述べていることも，これを支持しているとしている。その他に，多次元尺度法による回答の関係の分析も行われ，これらの方法を総合的に用いることによって，被験者の self-image の構造が把握できると述べられている。

第3部の「WAI 反応パターンの分析」では，WAI 技法で得られた反応を，第2部で示された基準書によって分類し，その反応パターンの分析を行っている。まず，第8章の「反応パターンの分析と Self-Image の構造」では反応パターンの分析方法論上の問題について検討が加えられている。第6章で示された反応頻度の分析では，個人の 20 の回答は1答ずつばらばらにされてしまい，個人を包括的に捉えることはできない。一方，第7章で示された WAI 反応の相互関連性の分析では，個人を包括的に捉えることにはある程度成功したが，そこから一般的な特徴を抽出することは成功していない。しかし，self-image を総合的に理解するためには，個人をなるべく包括的に捉え，しかも，そこから一般的特徴を捉える必要がある。そこで有効と考えられるのが，反応パターンを分析する方法である。反応パターンとは，個人の全体的な反応が，個々の反応のどのような組み合わせによって構成されているかを表したものである。つまり，類似した反応パターンを持つ2人の個人は，全体的な反応として類似していることになり，これを用いることによって，個人を包括的に比較分析することが可能となる。

一方，反応のカテゴリーの側から見れば，あるカテゴリーに対する全反応が，どのような個人の反応によって構成されているかが，反応パターンとなる。反応パターンが同一である2つのカテゴリーは，全く同一の人々によって反応されており，強い共変関係あるいは相関関係を持つことを意味する。

このような反応パターンの分析に有効な技法が，林の数量化Ⅲ類である。数量化Ⅲ類では，個人の反応パターンとカテゴリーの反応パターンを体系的に分析し，個人と反応カテゴリーの両者を分類する。具体的には，反応パターンに基づき個人差を反映するような複数の次元を導きだし，それらの次元上に反応カテゴリーを位置づける。このような複数の次元で構成される空間内では，類似した反応パターンを持つ2つのカテゴリーは近くに，異なる反応パターンを持つカテゴリーは遠くに位置づけられることになる。さらに，各カテゴリーの位置に基づいて，個人の位置づけも行われる。

ところで，WAI 反応に数量化Ⅲ類を適用する場合，自由記述の反応を何らかの反応カテゴリーで予め分類しておく必要がある。そのために著者は，基準書を反応カテゴリーとして用い，それに対する反応パターンを数量化Ⅲ類で分析することにしている。その結果，多くの個人から得られた反応は，反応パターンの類似性に基づいて，空間的に位置づけられる。このような空間は，多く

の個人の self-image を包括的に含んでおり，個人内の構造とは別の意味で self-image の構造と見ることができると結論づけている。

第9章の「小学生から高校生までを対象とした反応パターンの分析」では，小学生から高校生までの約 5,000 名の WAI 反応の反応パターンの分析が示されている。その結果，性格―デモグラフィックな属性の軸，自己に対する意識の軸，欲求・希望・願望の軸の3つの次元が得られている。さらに，各軸のカテゴリー・ウエイトに基づき，非階層クラスター分析で小項目を分類した結果，社会・生物的基礎，性格，そして，欲求と自己評価の3つのクラスターが得られている。このクラスターに基づいて被験者の分析を行った結果を考察して，self-image の発達の初期の段階で中心となるものは，社会・生物的基礎であり，その後，性格や欲求・自己評価が現れてくるとしている。これは，発達に伴って，self-image が分化して多様な内容を含むようになることを示しており，また，self-image が抽象化あるいは内面化することを示していると考察している。

さらに，第 10 章の「小学生から老人までを対象とした反応パターンの分析」では，小学生から老人までの約 14,000 名の WAI 反応を，1989 年度版基準書によって分類し，その反応パターンを数量化Ⅲ類で分析した結果について述べられている。そこでは，I. 内容的把握―形式的把握の軸，II. 自己に対する意識の軸，III. 実存的意識・非日常的意識の軸，IV. 欲求・希望・願望の軸，V. 家系・家族の軸の5つの次元が得られている。また，これらの軸での被験者のサンプル・スコアから，年齢や性別による self-image の具体的な変化が分析されている。さらに，数量化Ⅲ類で得られたカテゴリー・ウエイトに基づき，クラスター分析によって小項目を，A. 性格（気質），B. 性格（力動），C. 身体・能力・日常生活，D. 希望・願望，E. 祖父母・父母，F. 職業・家庭，G. 自己実現的欲求，H. 学校生活，I. 基本属性，J. 実在的自己意識の 10 のクラスターに分類し，これらのクラスターに対する言及率と性・年齢との関連を分析している。また，各年齢での WAI 反応の一般的な構成を，クラスターの言及率とクラスター間の関連から分析した結果が示されている。そして最後に，10 のクラスターをⅠ社会・生物的基礎，Ⅱ性格，Ⅲ欲求・自己評価の3つの大クラスターに併合し，それらに対する言及パターンの分析を行っている。

著者は，第 10 章で得られた結果から，self-image にはいくつかの大きな特徴があることを示唆している。その1つは，各個人の WAI 反応の中に意味的な連関があるということである。数量化Ⅲ類に基づく WAI 反応の分類は意味内容の類似に基づくものではなく，反応の相関関係あるいは共変関係に基づいたものである。それにも関わらず，クラスターが基準書とも対応するような意味内容のまとまりを持っている。2 つめの特徴は，身体を核とする身辺的な記述が self-image の不可欠な要素だということである。これらは，1 つのクラスターを形成し，しかもほとんどすべての被験者によって言及されている。また，発達的な特徴としては，児童期から青年期にかけて，個人の self-image が分化し，多様な内容の self-image が含まれるようになること，学生の間は学校生活が self-image の重要な要素であるに対し，卒業後は職業や家庭がそれに代わること，性格についての self-image は，児童期から青年期にかけて次第に顕著になること，高校生や大学生という子供時代の最終段階で希望や願望が顕著になり，加齢が進むに従って自己を包括的に意味づけたという欲求が，self-image に大きく反映されるようになることなどが示されたとしている。

第4部，第 11 章の「研究の総括と今後の展望」では，論文全体のまとめを行った上で，自我・自己研究における研究結果の意味づけを行っている。そこでは，第 2 章で示された自我・自己に関する3つの視点，即ち，領域あるいは範囲，構造，機能という視点から研究結果に考察を加えている。領域・範囲については，self-image が広い範囲に及んでおり，自我・自己の領域に関してもこのような広い領域を考慮する必要があるとしている。また，self-image の内容や，それに対する自我関与に大きな個人差があり，そこに個人の固有性が現れると主張している。構造については，個人内の構造と反応パターンの分析で示された構造が，質的に相互に異なるものであると指摘している。個人内の構造は，個人が self-image を主観的にどのように関連づけているかというと認知的な構造に注目したものであり，これは，その個人にとっての主観的な自我・自己を理解する上で有効性を持つと述べている。一方，反応パターンからの分析から得られた構造は，多くの個人の self-image を相互に位置づけたものであり，self-image の総体を理解したり，個々人を比較する上で有効なものだと述べている。特に，このような構造は，多様な自己意識を反映しており，自我・自己の構造を考える場合においても，自己意識を考慮する必要があると指摘している。自我・自己の機能については，本研究が self-image を分析対象

としているため，直接言及することはできないとしながらも，self-image は，主体的な自我・自己によって知覚あるいは想起され表現されたものであり，そこには主体的な自我・自己の機能が反映されていると述べている。また，自らの self-image を作りだし，それを維持しているのも自我・自己であるとし，自我・自己は，self-image との相互作用を行っていると考察している。

最後に，今後の展望について述べられている。まず，WAI 技法については，基準書の最終的な調整を行うこと，WAI 技法をパーソナリティ診断に用いるための技法として確立することを挙げている。分析技法については，self-image の相互関連性の分析技法の開発と併せて，より多くの個人を，より包括的に捉えられるような分析技法を開発していく必要があるとしている。また分析結果において self-image に指向的なものが多いことを指摘し，指向的な側面に焦点をあてた分析を行うことにより，自我・自己についての新たな知見が得られるのではないかと結んでいる。

以上のように，本論文は，自我・自己の問題について，WAI 技法という単純かつ自然な技法を用いながら，様々な視点から分析した意欲作である。本論文は，以下のような点において評価できるように思われる。

1. 自我・自己の問題に対して実証的かつ帰納的な分析を試みている点：

自我・自己に関しては，哲学における伝統もあり，理論的かつ演繹的な分析が主流であった。近年，心理学において実証的な研究も多く為されるようになったが，どちらかと言えば，演繹的な研究スタイルをとるものが多い。しかし，著者も指摘しているように，心理学において自我・自己の概念が研究者間で一致を見ない現状を考慮すれば，ア・プリオリな前提を多く持ち込む演繹的な研究だけでは限界があると言えよう。そういう意味では，実証的で帰納的な方法による研究は，地道ではあるが心理学における自我・自己研究に新たな知見をもたらす可能性をもっている。特に，本論文は，実証的・帰納的な方法を貫くために，大量のデータを収集し，分析手続きにも随所に配慮が認められる。このような研究姿勢は評価できるものと思われる。

2. self-image の内容を実証的に示している点：

本論文では，上でも指摘したような実証的・帰納的な手続きによって，self-image に関するいくつかの新しい知見を示している。その中でも特に重要と思われるものは，self-image の内容の及ぶ範囲についてである。それによると self-image は，社会的な属性，家族，身体，能力，性格，指向などに及んでいる。これは，self-image が個人のパーソナリティのあらゆる側面に及ぶことを示している。自我・自己とパーソナリティの関係については，多くの研究者によって理論的に考察されてきたが，ここで得られた結果は，このような問題についても実証的な立場から貴重な示唆を与えるものと言えよう。しかも，反応パターンの分析を通じて，self-image の内容を構造として把握する試みもなされており，self-image が社会・生物的基礎，性格，欲求と自己意識の 3 つに大きく分けられることが示されている。この分類は，実証的な手続きで得られたものであり，自我・自己，あるいは，自己意識を理解する上でも意味深いものと思われる。

3. self-image の発達的な変化を具体的に示している点：

本研究では，小学生から老人までの約 14,000 名を分析対象としており，その結果，self-image の発達に関していくつかの顕著な傾向を見出している。例えば，児童期から成人に至る発達では，社会的な属性の顕在性が薄れ，それに代わって性格が顕著になってくることや，self-image の内容が多様になり，複雑性を増すことなどが示されている。また，成人期から老年期にかけては，self-image の多様性が失われる傾向がある一方で，自己や社会に対する肯定的な態度が強くなることが示されている。このように，self-image のライフ・サイクルを通じての変化を知ることは，パーソナリティの発達の問題の解明においても意義あるものと思われる。

4. 新たな分析技法を積極的に導入している点：

WAI 技法は 40 年近く前に考案されたものであるが，その分析技法については，開発の余地があるとされながらも，あまりに大きな発展は見られなかった。その点，著者によって考察された回答間の相互関連性を分析する手法は，WAI 技法による個人分析に新たな道を開くものとして，発表当時学会においても評価された（審査者の 1 人は，この発表を聞き，発言を求めて自我研究における待望された実験であると述べ，後日，その内容を自著で紹介している）。また，WAI 反応の反応パターンの分析についても，反応パターンの分析を WAI 技法に適用した点は新たな試みと言える。反応パターンの分析それ自体は新しいものではないが，著者の用いている「内容分析→カテゴリー化→反応パターンの分析→クラスター化→クラスターによる反応分析」という手続きは，他の言語データの計量的分析に対しても応用可能性の高いものと言える。その他にも，クラスター・レベル

の反応パターンの分析やクラスター間の関連性の分析などの手法が示されている。これらの分析技法は，完成度には問題もあるが，その独創性は評価できる。

しかしながら，その一方で，本論文には以下のような問題点も散見される。

1. 先行する理論についての検討が十分とは言えない点：

第3章の自我・自己の実証的研究のレビューにおいて，過去のWAI技法を用いて行われた研究が網羅（たとえ文献名だけでも指摘）されていない。

特に，80年代後半の研究，例えば，Yardley のWAIの問題点を示した研究など。この研究結果から考えて，集団施行したものと個人的な反応を一緒にして分析していることには多少の疑問が残る。

また，WAI技法によって測定されるものは，Kuhn & McPartland によって，自己態度“Self attitude”と規定されていた。すなわち，自己概念とかセルフ・イメージとかの認知的側面のみならず，情意的（特に好悪），評価的側面（例えば自尊，自己卑下など）が含まれていたにもかかわらず，“self-image”という用語を終始使用してきたことにも疑問が残る。

2. 分析結果の解釈に十分な点や飛躍が見られる点：

文化の違いが self-image に与える影響についてはMontemayor らの研究結果をひいて言及していながら，WAI がきわめて culture-bound な手法である（特に日本人にとっては，アメリカと異なり，幼児の頃から，“WAY”, (“WAI”), “Tell me about yourself”は日常の遊びや，日常会話には入っていない）ことへの疑問にまで，議論が発展していない。

WAI や20答法の問題点の指摘がかなり甘い。例えば，チェックリスト法などを批判して，“どの位の項目が必要か不明 etc.”と指摘する一方，20答法の20が十分であると言える根拠は示されていない。

WAI で得られる self-image が，ごく一部であることを冒頭述べておきながら，後半，“WAI で得られる self-image が被験者にとって重要なもの”と述べている。単に，意識化，顕在化，言語化しやすいものということなのかもしれない。

3. 記述の重複など：

記述が重複している部分，冗長な部分が処々に見られる（第5章，第10章，第11章）。

また，研究の性質上，やむを得ないかもしれないが，考察と展望にもう少し突っ込んだものが欲しかった。

なお，本研究は第7章を除き，基本的には槇田ら（勿論，著者も中心メンバーであるが）のプロジェクト・チームが，永年，蒐集，改訂してきたデータを材料にして，著者が独創的な手法をもって処理したものである（従って，学会発表，雑誌論文など連名のものが多い）。

かかる経過のためか，第6章～第10章において，「槇田ら」，「著者ら」，「筆者は」などとなっているのは，一見用語の混乱を思わせる。

研究の性質上そうなったのは理解できるし，分離しがたい部分もあると思うが，共同研究の紹介と，そのデータをもとにして著者が行った解析とを分けて述べた方がよかったのではないかと思われる。

このように，本論文には理論的な検討，その他，いくつかの問題があることは否めない。しかし，自我あるいは自己は，多くの心理学者を悩ましてきた難問の1つであり，理論的な解決にもまだ多くの時間を要するものと思われる。そういう意味では，この難問に実証的な方法で挑もうとした姿勢は高く評価でき，本研究で示された分析結果は今後の研究に対する刺激となるであろう。

以上のような点を総合的に検討した結果，著者は本論文によって博士（社会学）の学位を授与されるに値するものと認められる。